日本のオペラ公演2016
──公演データの分析とその考察──

昭和音楽大学オペラ研究所・石 田 麻 子

1. はじめに

1-1. A表（大規模会場での公演）とB表（中・小規模会場での公演）、C表（演奏会形式等の公演）の区分【表1】

本項では、全幕実施されたオペラ公演のうち、756席以上の大規模会場での公演をA表に、756席未満の中・小規模会場での公演をB表に、それぞれ区分のうえ、分析している。この基準となった大阪音楽大学ザ・カレッジ・オペラハウスは、オペラ劇場としての機能を備えていて、小規模ではあるものの、大型のオペラ公演と中・小規模の公演とを便宜的に分ける目安となる。学校の体育館などでの公演は、オペラ公演や演奏会開催を主目的としない会場であり、座席数にかかわらず中・小規模公演に分類している。

また、演奏会形式・ハイライト公演など、通常の上演形式とは異なる公演形態のものを巻末に掲載し、公演概要については、「6. 演奏会形式など」の項で言及した。

1-2. 国内団体、教育研究団体、海外団体の分類について

（分類手法について）

オペラ団体のみならず、劇場等による公演、大学等の教育機関の学生等が自主的に行う公演、団体や劇場間の共同制作公演等は「国内団体公演」に、大学主催の教育研究発表を目的とした公演、団体や劇場・音楽堂等の運営する研修所等の発表公演は「教育研究団体公演」に、海外の歌劇場や音楽祭等の来日公演は「海外団体公演」に分類している。

従って、「国内団体」の研修所公演は、「教育研究団体」になる。例えば、関西二期会による公演は「国内団体」で、関西二期会研修所公演は「教育研究団体」である。一方で、劇場・音楽堂等、オペラ団体等がプロジェクト形式で実施したアカデミー公演等は「国内団体」に分類する。例えば、オペラシアターこんにゃく座によるオペラ塾修了公演、小澤征爾音楽塾オペラ・プロジェクト等は「国内団体」による公演とした。

（団体数について）

一つの団体が他団体と共同制作などを実施した場合は、その団体が単独で実施した場合とは区別し、別団体と考えた。また、同じホールであっても協働先が変わり、制作体制が異なる場合などは、別組織としてカウントした。これは、プロジェクトを組んで、新たな組織間連携が生まれている状況の把握を重視したためである。近年、こうした動きが活発化していることは特に注目に値する。日本のオペラ制作は、その主体がその都度姿を変化させながら、適した体制を模索し続けているとも言える。

表1　分析対象と上演団体の区分（○は本稿での分析対象、×は対象とせず、巻末に公演表を掲載）

	1．国内団体	2.教育研究団体	3. 海外団体
A表：大規模会場公演＝756席以上の客席数	○	○	○
B表：中・小規模会場公演＝756席未満の客席数	○	○	○
C表：演奏会形式等	分析記事のみ（6．演奏会形式など）		

2. 日本のオペラ公演2016年

2-1. 総上演回数と活動団体数の推移【図1、表2、図2】

2016年は、毎年分析対象としているA表とB表をあわせた総上演回数が1,100回となり、1,125回だった2015年よりも減少した。毎年、こうした若干の増減を繰り返しているものの、総上演回数は、ほぼ1,100回前後で推移している状況にある。また、2015年に上演活動を行った団体数は273団体、2016年には323団体となり、2013年に急増して312団体になったことに比べても、さらに増加した。既存の組織が連携し合うことで生まれた新規プロジェクトや歌手等が個人的にプロデュースする公演等が増えたことによる。

大規模会場での公演は、2015年の505回から2016年には463回へと減った。中・小規模会場は、2015年の620回から2016年は637回と増加した。日本各地のオペラ団体や劇場・音楽堂等などを含む国内団体に関しては、2015年は240団体による991回だったのが、2016年は298団体による995回と、公演回数は横ばいながら、団体数が大幅に増加している。

教育研究団体は、学生やゼミ主催等、プロジェクト形式の公演は、国内団体に分類している。とはいえ、2015年は24団体による66回だったのが、2016年は18団体による44回で大幅減となった。大学や研修所等主催の、学生等の教育を主たる目的としたオペラ公演が減る傾向にあるのだろうか。今後に注目したい。

海外団体は一時期、200回を超える公演が

図1　総上演回数と活動団体数の推移

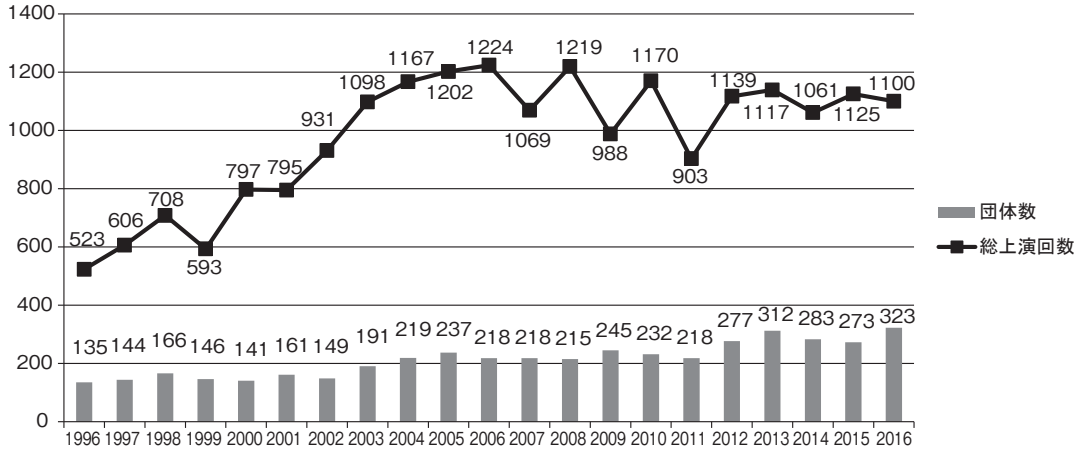


表2　2016年のカテゴリー別オペラ上演団体活動状況一覧

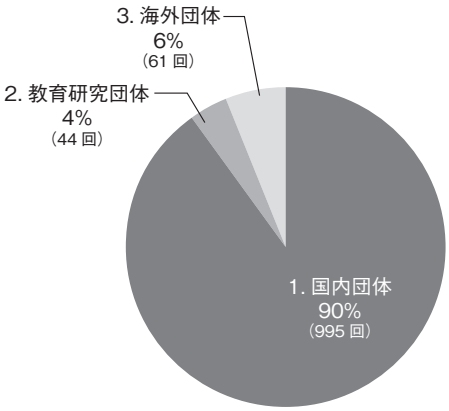
A. 大規模会場（756席以上）		
カテゴリー	団体数	総上演回数
1.国内団体	109	380
2.教育研究団体	10	22
3.海外団体	7	61
合計/総団体数・総上演回数	126	463/1100

B. 中・小規模会場（756席未満）		
カテゴリー	団体数	総上演回数
1.国内団体	280	615
2.教育研究団体	8	22
3.海外団体	0	0
合計/総団体数・総上演回数	288	637/1100

合計（A＋B）		
カテゴリー	団体数＊	総上演回数
1.国内団体	298	995
2.教育研究団体	18	44
3.海外団体	7	61
合計	323	1100

＊団体数の合計は、A表とB表をあわせて再度集計したもの。同一の団体が規模の異なる会場で公演した場合もあるため、A表とB表を合計した数よりも少なくなる。

図2　各カテゴリーの総上演回数が全体に占める割合



記録されてきたが、2011 年の東日本大震災をきっかけに激減して以来、減少したままの状況が続いている。2015 年の来日団体は、9 団体で上演回数は 68 回だったのが、2016 年は 7 団体で 61 回と、さらに減る傾向にある。

2-2. 国内団体公演【表3、表4-1、表4-2】

表 3 では、2016 年に大規模会場で 10 回以上の公演を実施した国内団体の活動についてまとめた。これには各団体所属歌手が個別に主催して実施した団会員企画等は含めていない。

例年、国内の大規模な公演を行う団体の中でも、最多の公演数を確保してきた東京二期会が前年に引き続き大規模な公演を実施、2016 年の総上演回数は 29 回と、前 2015 年の 24 回から増加した。《イル・トロヴァトーレ》は、東京文化会館での 4 回公演を実施。さらに、共同制作公演となった《さまよえるオランダ人》が神奈川と滋賀で 2 回ずつ、加えて iichiko 総合文化センター グランシアタで 1 回の計 5 回公演。神奈川県民ホールとびわ湖ホール、iichiko 総合文化センターの 3 館に、東京二期会、神奈川フィルハーモニー管弦楽団、京都市交響楽団、九州交響楽団が加わって行われた。《フィガロの結婚》も東京文化会館での 4 回公演に加え、富山市オーバード・ホールで 1 回公演を行って計 5 回公演となるなど、複数の会場で公演活動を展開している。《魔笛》は、あいちトリエンナーレとして、本公演前の鑑賞教室 1 回を含めて合計 3 回実施した。

日本オペラ振興会は、藤原歌劇団と日本オペラ協会の 2 団体を持つ組織で、イタリア・オペラと日本オペラを取り上げている。藤原歌劇団は、《トスカ》を 2 回、「川崎・しんゆり芸術祭 2016 Arte Ricca しんゆり」で《愛の妙薬》を 2 回、共同制作による《ドン・パスクワーレ》を 4 回、《カプレーティ家とモンテッキ家》を 2 回。この他、藤沢市民オペラ招聘公演として《蝶々夫人》を 1 回、昭和女子大学主催での《椿姫》公演 1 回のほか、小規模会場での《椿姫》を各 1 回、合計で 13 回の公演を実施した。さらに日本オペラ協会は、《天守物語》を、「日本オペラシリーズ No.76」として 2 回、兵庫県立芸術劇場との共同制作で 2 回公演している。

日生劇場は、「ニッセイ名作シリーズ 2016」を実施、《セビリアの理髪師》を自らの劇場で 8 回（6 月 13 日～24 日）の後、富山（7 月 8 日）、石川（7 月 12 日）、大分（9 月 9 日）、高知（9 月 21 日）、香川（9 月 27 日）で合計 13 回公演した。これらは中学生や高校生を招待してのもので、各地で本格的なオペラ公演鑑賞の貴重な機会を提供している。同公演は、「NISSAY OPERA 2016」の枠でも一般向けに 2 回公演を行っている。同じく「ニッセイ名作シリーズ 2016」で《後宮からの逃走》を学校公演で 3 回、「NISSAY OPERA 2016」として一般公演 1 回の計 4 回公演を行った。

びわ湖ホールは、大ホールで《さまよえるオランダ人》を 2 回（プロジェクト全体では 5 回）、《ドン・パスクワーレ》を 1 回（プロジェクト全体では 4 回）上演。これは「劇場・音楽堂等活性化事業（共同制作支援事業）」の公演

助成を活用したもの。中ホールでは《フィガロの結婚》を2回、マスネ《ドン・キホーテ》を2回公演。声楽アンサンブル・メンバーを中心に、キャスティングが行われた。

ジャパン・アーツは、所属アーティストを起用したオペラ公演を企画制作しており、2016年は《夕鶴》を全国10都県で公演した。海外招聘オペラ団体の巡回公演にノウハウのある同社による、典型的な巡回型公演となった。

オペラシアターこんにゃく座は、例年200回を超える公演を実施している団体。2016年も243回を数えた（こんにゃく座オペラ塾の修了公演として実施された《金色夜叉》2回公演を除く）。

表3には含まれないものの、文化庁の「文化芸術振興費補助金（トップレベルの舞台芸術創造事業）」（平成27年度まで）、および「舞台芸術創造活動活性化事業」（平成28年度から）の助成を受けて実施された大規模な公演も挙げておきたい。関西は劇場、音楽堂関係

表3　2016年の国内団体公演活動データ*1

団体名	上演作品	A.大規模会場		B.中・小規模会場		合計
		上演回数	総上演回数	上演回数	総上演回数	
オペラシアターこんにゃく座	ロはロボットのロ	23	63	31	180	243
	ネズミの涙	22		9		
	ピノッキオ	6		34		
	おぐりとてるて	5		8		
	銀のロバ	2		33		
	森は生きている	5		47		
	グスコーブドリの伝記	0		7		
	Opera club Macbeth	0		11		
東京二期会	イル・トロヴァトーレ	4	29	0	0	29
	さまよえるオランダ人*2	5				
	フィガロの結婚	5				
	トリスタンとイゾルデ	4				
	コジ・ファン・トゥッテ	4				
	魔笛*3	3				
	ナクソス島のアリアドネ	4				
日生劇場	セビリアの理髪師*4	15	23	0	0	23
	ドン・パスクワーレ*5	4				
	後宮からの逃走	4				
藤原歌劇団*6	トスカ	2	12	0	1	17
	蝶々夫人	1				
	愛の妙薬	2				
	ドン・パスクワーレ*5	4				
	カプレーティ家とモンテッキ家	2				
	椿姫	1		1		
日本オペラ協会	天守物語*7	4	4	0		
びわ湖ホール	さまよえるオランダ人*2	5	13	0	0	13
	フィガロの結婚	2				
	ドン・パスクワーレ*5	4				
	ドン・キホーテ	2				
ジャパン・アーツ	夕鶴	11	11	0	0	11
上位5団体合計上演回数／総上演回数	—	—	155/463	—	181/637	336/1100

＊1　大規模会場で10回以上の上演をしている団体。大規模会場での総上演回数の合計順。共催公演、共同制作公演を含む。
＊2　《さまよえるオランダ人》は、複数の劇場や団体等の共同制作公演。びわ湖ホールと東京二期会の各5回は同じプロダクション。
＊3　《魔笛》は制作協力団体。3回のうち1回は鑑賞教室で、本公演の前に実施されたもの。
＊4　日生劇場は、《セビリアの理髪師》を、自劇場での10回のほかに、富山、石川、香川、高知、大分で各1回ずつ公演している。
＊5　《ドン・パスクワーレ》は、複数の劇場や団体等の共同制作公演で、日生劇場と藤原歌劇団、びわ湖ホールの各4回は同じプロダクション。
＊6　藤原歌劇団と日本オペラ協会は、（公財）日本オペラ振興会として、同一組織にあるオペラ団体。
＊7　《天守物語》は、兵庫県立芸術文化センターとの共同プロジェクト公演2回を含む。

表 4-1　2016 年新国立劇場主催のオペラ公演（新国立劇場オペラパレスおよび中劇場プレイハウス：大規模会場公演）

上演月	作品名	作曲家名	上演回数	公演タイトル	特記事項
1月	魔笛	W.A.モーツァルト	4	2015/2016 シーズンオペラ	全2幕 / 字幕付原語上演
2〜3月	イェヌーファ	L.ヤナーチェク	5	2015/2016 シーズンオペラ	新制作 / 全3幕 / 字幕付原語上演 ベルリン・ドイツ・オペラの協力による上演
3月	サロメ	R.シュトラウス	4	2015/2016 シーズンオペラ	全1幕 / 字幕付原語上演
4月	ウェルテル	J.マスネ	5	2015/2016 シーズンオペラ	新制作 / 全4幕 / 字幕付原語上演
4月	アンドレア・シェニエ	U.ジョルダーノ	4	2015/2016 シーズンオペラ	全4幕 / 字幕付原語上演
5〜6月	ローエングリン	R.ワーグナー	5	2015/2016 シーズンオペラ	全3幕 / 字幕付原語上演
7月	夕鶴	團伊玖磨	3	2015/2016 シーズンオペラ	全1幕 / 字幕付日本語上演
7月	夕鶴	團伊玖磨	6	平成28年度　新国立劇場　高校生のためのオペラ鑑賞教室	全1幕 / 字幕付日本語上演
10月	楽劇「ニーベルングの指環」第1日 ワルキューレ	R.ワーグナー	6	平成28年度（第71回）文化庁芸術祭オープニング・オペラ公演 2016/2017 シーズン オープニング公演	新制作 / 全3幕 / 字幕付原語上演 フィンランド国立歌劇場（ヘルシンキ）の協力による上演
11月	ラ・ボエーム	G.プッチーニ	5	平成28年度（第71回）文化庁芸術祭主催公演 2016/2017 シーズンオペラ	全4幕 / 字幕付原語上演
11〜12月	セビリアの理髪師	G.ロッシーニ	5	平成28年度（第71回）文化庁芸術祭協賛公演 2016/2017 シーズンオペラ	全2幕 / 字幕付原語上演
—	10作品	9人	52/463	—	—

表4-2　2016年新国立劇場主催のオペラ公演（他会場での公演：大規模会場公演）

上演月	作品名	作曲家名	上演回数	公演タイトル	特記事項
10月	フィガロの結婚	W.A.モーツァルト	2	平成28年度 文化庁文化芸術による地域活性化・国際発信推進事業　平成28年度 新国立劇場高校生のためのオペラ鑑賞教室・関西公演	全4幕 / 字幕付原語上演 主催：京都市 / ロームシアター京都（(公財）京都市音楽芸術文化振興財団）/ 新国立劇場　会場：ロームシアター京都
—	1作品	1人	2/463	—	—

の活動以外に、関西二期会のプッチーニ「三部作」と《ファウスト》、関西歌劇団《こうもり》《皇帝ティートの慈悲》、堺シティオペラによる《ナクソス島のアリアドネ》がある。さらに、東京オペラ・プロデュースは、オッフェンバック作曲《青ひげ》とマスネ作曲の《グリゼリディス》（日本初演）を上演した。

新国立劇場の主催公演は、新制作が3つ。2〜3月にヤナーチェク作曲《イェヌーファ》を新制作して5回上演、4月にマスネ作曲《ウェルテル》を5回、さらに2016/2017シーズンのオープニングとして、10月に楽劇「ニーベルングの指環・第1日」《ワルキューレ》を6回上演した。このうち、《イェヌーファ》はベルリン・ドイツ・オペラ、《ワルキューレ》はフィンランド国立歌劇場のプロダクションで、それぞれ上演実績のあるもの。

新国立劇場が「高校生のためのオペラ鑑賞

教室・関西公演」《フィガロの結婚》は2回公演。今年は、京都市交響楽団のオーケストラ・ピットでの演奏により、ロームシアター京都で行われた。

2-3. 教育研究団体公演【表5】

教育研究団体の公演は、2016年は44回。2015年の66回から大きく数を減らした。各地の芸術系大学、劇場やオペラ団体が運営する研修所などが、教育成果を一般に広く公開するもので、定期的に公演を実施している。芸術系大学によるオペラ公演の数が減ったことが今回の結果の要因である。若い時期に舞台経験を積むことが、将来への大きなステップになることは間違いなく、必ずしも大規模な舞台ではなくても、確実な公演機会の確保は重要である。

教育研究団体公演で取り上げられる作品は、学生や卒業生など若い歌手たちが出演することもあって、モーツァルトのアンサンブル・オペラが数多く上演され、適切な機会提供となっている。

2-4. 海外団体公演【表6、図3】

海外団体公演は、2016年は7団体による61回公演と、2015年に行われた9団体の公演68回からさらに減少している。

2016年、大規模な上演形態「拠点型」公演（4都市以下での公演）は、ウィーン・フォルクスオーパー、ウィーン国立歌劇場のオーストリア勢とゲルギエフ率いるマリインスキー劇場の3つの歌劇場だった。

「巡回型」公演（5都市以上での公演）は、プラハ国立歌劇場が11都市で《魔笛》と《ノルマ》を合計15回とりあげた。《ノルマ》の一部公演に、エディタ・グルベローヴァがキャスティングされたことが話題となった。この他、ローマ・イタリア歌劇場が14回の公演を実施。名作オペラで日本全国を公演する、東欧系の歌劇場来日公演の典型的な興行形態が、例年同様続いた。

海外団体による公演は、2014年に26都道府県で、2015年は23都道府県、2016年は24都府県の、比較的大規模な会場で行われており、地域のニーズを示す結果となっている。

3. 指揮者と演出家

（指揮者）

2016年に登場した指揮者は、国内外あわせて213人。ここでは、大規模な会場で登場

表5　2016年の教育研究団体公演活動データ*1

団体名	作品名	作曲家名	A.大規模会場		B.中・小規模会場		合計
			上演回数	総上演回数	上演回数	総上演回数	
新国立劇場オペラ研修所	フィガロの結婚	W.A.モーツァルト	3	3	0	3	6
	ジャンニ・スキッキ	G.プッチーニ	0		3		
焼津中央高等学校合唱部	フィガロの結婚	W.A.モーツァルト	4	4	0	0	4
愛知県立芸術大学	皇帝ティートの慈悲	W.A.モーツァルト	2	3	0	0	3
	ラ・ボエーム	G.プッチーニ	1				
大阪音楽大学	ドン・ジョヴァンニ	W.A.モーツァルト	2	2	0	0	2
国立音楽大学	ドン・ジョヴァンニ	W.A.モーツァルト	2	2	0	0	2
昭和音楽大学	コジ・ファン・トゥッテ	W.A.モーツァルト	2	2	0	0	2
洗足学園音楽大学・大学院	フィガロの結婚	W.A.モーツァルト	2	2	0	0	2
東京藝術大学	コシ・ファン・トゥッテ	W.A.モーツァルト	2	2	0	0	2
8団体合計上演回数／総上演回数	6作品	2人	—	20/463	—	3/637	23/1100

＊1　大規模会場で、教育研究型公演の開催実績が2回以上ある団体。合計および50音順の掲載。学生主催公演やゼミ単位の公演、有志による公演などは含めていない。

した指揮者を中心にとりあげてみたい。

2016年、大規模会場での公演で最も回数の多かった指揮者は園田隆一郎の24回である。これは日生劇場の《セビリアの理髪師》を15回、関西二期会《ファウスト》、びわ湖ホールの《フィガロの結婚》と《ドン・キホーテ》、藤原歌劇団の《愛の妙薬》を各2回、《蝶々夫人》を1回振ったことによる。次は、柴田真郁が中・小規模会場での公演もあわせて16回。これには、関西歌劇団の《こうもり》2回、藤原歌劇団の《トスカ》2回等が含まれる。飯守泰次郎が新国立劇場の《ローエングリン》5回と《ワルキューレ》6回、佐藤正浩が名古屋二期会《蝶々夫人》2回、藤原歌劇団の《椿姫》を異なるプロダクションで2回等、それぞれ合計11回の公演を振った。

エリック・ミーリアが小澤征爾音楽塾《子どもと魔法》で6回、ダニエーレ・アジマンが関西二期会のプッチーニ「3部作」で合計6回、新国立劇場の公演では、エマニュエル・プラッソンが《ウェルテル》を5回、トマーシュ・ハヌスが《イェヌーファ》5回、それぞれ印象的な音楽を聴かせた。マレク・ヤノフスキはウィーン国立歌劇場公演《ナクソス島のアリアドネ》で3回だったが、東京・春・音楽祭の《ジークフリート》2回とあわせると5回となった。

「巡回型」公演では、アーツカンパニー公演で佐々木克仁が26回振っている。東京オペレッタ劇場の《ボッカッチョ》や《小鳥売り》で角岳史が19回、さらに現田茂夫の11回は

図3　2016年海外団体の公演（全61回）・所属国別割合

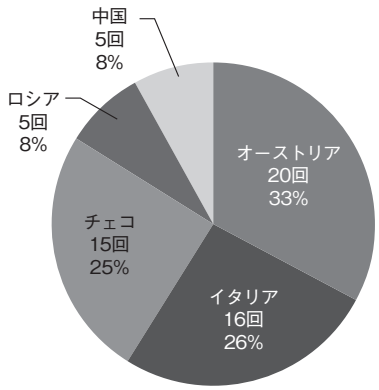


表6　2016年海外団体[*1]の公演活動データ（A.大規模会場）

形態[*2]	上演月	国名	劇場名	上演作品名	作曲家名	上演回数	合計/総上演回数	開催都市数
拠点	5月	オーストリア	ウィーン・フォルクスオーパー	チャルダーシュの女王	E.カールマン	3	11	1
				こうもり	J.シュトラウスⅡ世	4		1
				メリー・ウィドウ	F.レハール	4		1
巡回	6~7月	イタリア	ローマ・イタリア歌劇団	ラ・ボエーム	G.プッチーニ	14	14	12
その他	9月	イタリア	ボローニャ歌劇場フィルハーモニー	トゥーランドット	G.プッチーニ	2	2	1
拠点	10月	ロシア	マリインスキー劇場	エフゲニー・オネーギン	P.I.チャイコフスキー	3	5	2
				ドン・カルロ	G.ヴェルディ	2		1
巡回	10~11月	チェコ	プラハ国立歌劇場	魔笛	W.A.モーツァルト	9	15	9
				ノルマ	V.ベッリーニ	6		5
拠点	10~11月	オーストリア	ウィーン国立歌劇場	ナクソス島のアリアドネ	R.シュトラウス	3	9	1
				フィガロの結婚	W.A.モーツァルト	3		1
				ワルキューレ	R.ワーグナー	3		1
その他	12月	中国	江蘇省演芸集団	鑑真東渡	唐 建平	5	5	3
—		5ヶ国	7団体	13作品	11人	61	61/1100	24都市

＊1　劇場名は、主催者表記に準じる。
＊2　形態の分類手法は以下のとおり。
「拠点型」：1回の来日で、4都市以下での公演を行う歌劇場公演。東京23区とそれ以外の東京都内の市は分け、各1都市として区別する。
「巡回型」：1回の来日で、5都市以上で公演を行う歌劇場公演。
「その他」：音楽祭、合唱団等の芸術団体による公演。
＊3　ザルツブルク・イースター音楽祭/ザクセン州立歌劇場の《ラインの黄金》は、「ホール・オペラ」形式のため、C表に分類した。

《夕鶴》の巡回公演による。

海外招聘オペラ公演のうち、「拠点型」公演の指揮者では、マリインスキー劇場のワレリー・ゲルギエフ、今回が最後の来日となったウィーン・フォルクスオーパーのルドルフ・ビーブル（2017年1月逝去）等の名前がある。

このほかの「巡回型」公演では、ローマ・イタリア歌劇団公演で、カルロ・パッレスキが、《ラ・ボエーム》での14回を筆頭に、リハルド・ハインが、プラハ国立歌劇場公演の《魔笛》で9回、ペーター・ヴァレントヴィッチが同公演の《ノルマ》で6回となった。

（演出家）

2016年、演出家は209人およびグループとなった。この数字には再演演出家は含めていない。

大規模会場での演出回数の点では、粟國淳が35回と圧倒的な数字となった。日生劇場制作の《セビリアの理髪師》が全国各地の大規模会場で上演、この他に新国立劇場の《ラ・ボエーム》を再演したり、「ひろしまオペラルネッサンス」で《修道女アンジェリカ》と《ジャンニ・スキッキ》等を上演したりして回数を重ねた。岩田達宗が、堺シティオペラ《ナクソス島のアリアドネ》2回、名古屋二期会の《蝶々夫人》2回、北海道二期会の《カヴァレリア・ルスティカーナ》《修道女アンジェリカ》各2回等の演出で23回となった。

この他、オペラシアターこんにゃく座の「巡回型」公演を中心とした演出で、鄭義信が《ロはロボットのロ》54回、《ネズミの涙》31回公演で、合計85回公演となった。同じく同団所属の大石哲史が《森は生きている》52回、同団オペラ塾2015年度修了公演《金色夜叉》2回と他団体による《カルメンゲーム》2回で合計56回、伊藤多恵が40回、恵川智美が38回と圧倒的な回数となっている。

4. オペラ作品と作曲家【表7】

2016年は海外の作品上演は669回となり、2015年の690回からは数字を減らしたものの、作品数は、2014年の87作品、2015年には89作品、2016年には99作品と増加しており、一層幅広い作品が取り上げられたことがわかる。日本の作品の上演回数は、2012年以降、微減傾向が続いていて、2016年は431回と、2015年の435回から減少した。一方で、日本の作品は、2016年は86作品で、2015年の84作品とほぼ変わらない。

4-1. 海外のオペラ作品と作曲家【表8-1、表8-2】

2016年は《ラ・ボエーム》と《魔笛》が41

表7　2016年 オペラ作品、作曲家別の上演回数

	海外の作品			日本の作品			合計		
	作曲家数	作品数	上演回数	作曲家数	作品数	上演回数	作曲家数	作品数	総上演回数
2004年	49人	99作品	753回	43人	61作品	414回	92人	160作品	1167回
2005年	57人	111作品	826回	50人	60作品	376回	107人	171作品	1202回
2006年	47人	100作品	800回	50人	71作品	424回	97人	171作品	1224回
2007年	55人	105作品	721回	41(46)人	59作品	352回	96(101)人	164作品	1073回
2008年	50(51)人	107作品	782回	51(52)人	70作品	437回	101(103)人	177作品	1219回
2009年	49(50)人	99作品	653回	48(49)人	48作品	335回	97(99)人	147作品	988回
2010年	42(44)人	86作品	654回	41人	59作品	516回	83(85)人	145作品	1170回
2011年	38人	88作品	530回	34(36)人	51作品	373回	72(74)人	139作品	903回
2012年	51(52)人	97作品	636回	55(56)人	75作品	481回	106(108)人	172作品	1117回
2013年	41(45)人	99作品	675回	56(59)人	83作品	464回	97(104)人	184作品	1139回
2014年	44人	87作品	607回	50(52)人	84作品	454回	94(96)人	171作品	1061回
2015年	44(45)人	89作品	690回	58(61)人	84作品	435回	102(106)人	173作品	1125回
2016年	51(53)人	99作品	669回	52人	86作品	431回	103(105)人	185作品	1100回

＊（ ）内は、共作者・編曲者等を入れた場合の数字。

回で、総上演回数では1位になった。《ラ・ボエーム》は、新国立劇場が5回、ローマ・イタリア歌劇団の「巡回型」公演で14回のほか、各地のオペラ団体が多様な規模や形態で上演したことによる。《魔笛》は、新国立劇場の4回公演のほか、プラハ国立歌劇場が「巡回型」公演で9回取り上げている。《フィガロの結婚》は、東京二期会、新国立劇場、ウィーン国立歌劇場等が大規模な会場で公演したことが目立つ動きだった。

モーツァルト、プッチーニ、ヴェルディが上位を占めるのも例年同様の傾向であるが、2016年もモーツァルトが124回とトップだった。

一方で、新しい作品の上演も取り上げておこう。《ジャパン・オルフェオ》が4回、《眠れる美女》が2回、《鑑真東渡》が5回、それぞれ新作として創作上演された。《グリゼリディス》は東京オペラ・プロデュースによる上演となったものの、他には目立った動きは

表8-1　2016年に日本で上演された海外のオペラ作品
（大規模会場での上演実績のあるもの、全99作品中・上位17作品、タイトルは便宜的に統一）

No.	作品名	作曲家名	A.大規模会場	B.中・小規模会場	合計
1	ラ・ボエーム	G.プッチーニ	28	13	41
1	魔笛	W.A.モーツァルト	25	16	41
3	フィガロの結婚	W.A.モーツァルト	29	10	39
4	カルメン	G.ビゼー	5	28	33
5	こうもり	J.シュトラウスⅡ世	18	4	22
6	セビリアの理髪師	G.ロッシーニ	20	1	21
7	ヘンゼルとグレーテル	E.フンパーディンク	6	13	19
8	蝶々夫人	G.プッチーニ	12	6	18
9	メリー・ウィドウ	F.レハール	9	8	17
9	椿姫	G.ヴェルディ	6	11	17
11	ドン・ジョヴァンニ	W.A.モーツァルト	9	7	16
11	コジ・ファン・トゥッテ	W.A.モーツァルト	8	8	16
13	ジャンニ・スキッキ	G.プッチーニ	8	5	13
13	カヴァレリア・ルスティカーナ	P.マスカーニ	6	7	13
15	修道女アンジェリカ	G.プッチーニ	8	4	12
15	子どもと魔法	M.ラヴェル	6	6	12
15	トスカ	G.プッチーニ	5	7	12
合計/総上演回数	—	—	208/463	154/637	362/1100

表8-2　2016年に日本で上演された海外の作曲家　（全51人中、上位11人）

No.	作曲家名	上演回数
1	W.A.モーツァルト	124
2	G.プッチーニ	113
3	G.ヴェルディ	41
4	G.ビゼー	33
5	G.ドニゼッティ	32
6	G.ロッシーニ	25
7	G.C.メノッティ	23
7	R.ワーグナー	23
9	J.シュトラウスⅡ世	22
10	E.フンパーディンク	19
10	J.マスネ	19
合計/総上演回数	—	474/1100

なく、新たな創作作品という視点での広がりはさほど感じられない結果となった。

4-2. 日本のオペラ作品と作曲家【表9-1、表9-2】

「巡回型」公演を全国で展開しているオペラシアターこんにゃく座の上演が上位を占めたほか、團伊玖磨作曲《夕鶴》は新国立劇場とジャパン・アーツによるプロダクションで回数を重ねた。

新しい日本のオペラ作品もいくつか。寺嶋陸也作曲《グスコーブドリの伝説》、中村透作曲《あちゃーあきぬ島～南島幻想曲～》、西村朗作曲《中也！》など。これらがレパートリー作品として定着するためには、再演を重ねることが必須となる。これには、初演の主催者が意識的に上演を重ねていくことが近道には違いない。

5. 上演地域の分布と会場別データ【表10、表11、図4、表12】

オペラ公演開催が確認できなかった県の有無が毎年の関心の一つとなる。2014年は高知県、2015年は佐賀県での公演が確認できなかったが、2016年は全都道府県でのオペラ公演開催が確認された。

2016年は、首都圏の東京、神奈川に加えて愛知が3位に入り、大阪、千葉、兵庫が続いた。他には、埼玉、広島、福岡、北海道が10位までに入った。

東京は、2016年は394回となり、依然として他を引き離しているものの、2015年の424回から大きく数を減らした。内訳は、国内団体による公演が、2015年が376回だったのが、2016年は348回となったことが要因である。海外団体の上演回数は2015年が26回だったのが2016年は29回でほぼ同数だが、教育研究団体は2015年が22回だったのが17回と、これも減っている。今回上位に入った愛知は、愛知県文化振興事業団や名古屋市文化振興事業団等の劇場・音楽堂の主催公演、名古屋二期会や名古屋オペラ協会等オペラ団体の主催公演、教育研究団体の公演が大小規模の会場を使って行われたことで前年の49回から59回に増えたことが原因である。

表9-1　2016年に国内で上演された日本のオペラ作品（A.大規模会場）　＊大規模会場で、上演回数10回以上の作品。

No.	作品名	作曲家	上演回数	上演団体数	公演団体	備考
1	口はロボットの口	萩　京子	23	1	オペラシアターこんにゃく座	中・小規模会場で31回公演あり
2	ネズミの涙	萩　京子	22	1	オペラシアターこんにゃく座	中・小規模会場で9回公演あり
3	夕鶴	團伊玖磨	20	2	新国立劇場/ジャパン・アーツ	—
合計/総上演回数		—	65/463	—	—	—

表9-2　2016年に国内で上演された日本のオペラ作品（B.中・小規模会場）

＊中・小規模会場で、上演回数20回以上の作品。

No.	作品名	作曲家	上演回数	上演団体数	公演団体	備考
1	森は生きている	林　光	53	2	オペラシアターこんにゃく座/静岡室内歌劇場	大規模会場で6回公演あり
2	ピノッキオ	萩　京子	34	1	オペラシアターこんにゃく座	大規模会場で6回公演あり
3	銀のロバ	萩　京子	33	1	オペラシアターこんにゃく座	大規模会場で2回公演あり
4	口はロボットの口	萩　京子	31	1	オペラシアターこんにゃく座	大規模会場で23回公演あり
合計/総上演回数		—	151/637	—	—	—

表10　2016年の都道府県別上演回数

No.	都道府県名	国内団体		教育研究団体		海外団体		合計		
		団体数	上演回数	団体数	上演回数	団体数	上演回数	団体数	上演回数	上演回数順位
1	北海道	8	22	0	0	0	0	8	22	**10**
2	青　森	1	2	0	0	0	0	1	2	43
3	岩　手	3	6	0	0	1	1	4	7	30
4	宮　城	5	14	0	0	1	1	6	15	13
5	秋　田	1	1	0	0	0	0	1	1	45
6	山　形	5	7	0	0	0	0	5	7	30
7	福　島	1	1	0	0	0	0	1	1	45
8	茨　城	4	6	0	0	0	0	4	6	34
9	栃　木	5	11	0	0	0	0	5	11	17
10	群　馬	5	8	0	0	0	0	5	8	27
11	埼　玉	17	43	0	0	1	1	18	44	**7**
12	千　葉	8	47	1	1	0	0	9	48	**5**
13	東　京	109	348	4	17	6	29	119	394	**1**
14	神奈川	26	72	2	4	3	6	31	82	**2**
15	新　潟	4	6	0	0	1	1	5	7	30
16	富　山	7	8	0	0	1	1	8	9	21
17	石　川	2	2	0	0	1	1	3	3	40
18	福　井	1	3	0	0	0	0	1	3	40
19	山　梨	4	6	0	0	0	0	4	6	34
20	長　野	5	10	0	0	1	1	6	11	17
21	岐　阜	4	8	0	0	0	0	4	8	27
22	静　岡	10	16	1	4	1	1	12	21	11
23	愛　知	18	49	3	8	2	2	23	59	**3**
24	三　重	3	11	0	0	1	1	4	12	16
25	滋　賀	3	13	0	0	1	1	4	14	14
26	京　都	6	14	2	3	2	3	10	20	12
27	大　阪	15	50	2	5	2	2	19	57	**4**
28	兵　庫	24	44	1	2	1	1	26	47	**6**
29	奈　良	3	7	0	0	2	4	5	11	17
30	和歌山	2	9	0	0	0	0	2	9	21
31	鳥　取	1	1	0	0	0	0	1	1	45
32	島　根	2	5	0	0	0	0	2	5	36
33	岡　山	3	13	0	0	0	0	3	13	15
34	広　島	8	31	0	0	0	0	8	31	**8**
35	山　口	3	7	0	0	0	0	3	7	30
36	徳　島	3	5	0	0	0	0	3	5	36
37	香　川	6	9	0	0	0	0	6	9	21
38	愛　媛	3	4	0	0	1	1	4	5	36
39	高　知	4	9	0	0	0	0	4	9	21
40	福　岡	6	22	0	0	2	2	8	24	**9**
41	佐　賀	2	3	0	0	0	0	2	3	40
42	長　崎	2	4	0	0	0	0	2	4	39
43	熊　本	4	11	0	0	0	0	4	11	17
44	大　分	6	8	0	0	1	1	7	9	21
45	宮　崎	1	2	0	0	0	0	1	2	43
46	鹿児島	3	8	0	0	0	0	3	8	27
47	沖　縄	4	9	0	0	0	0	4	9	21
合計	—	—	995	—	44	—	61	—	1100	—

表11　2016年の都道府県別・地域別総計

都道府県名	A. 大規模会場		B. 中・小規模会場		上演回数比率	地域
	団体数	上演回数	団体数	上演回数	総上演回数	
北海道	3	6	6	16	5.00%	北海道・東北
青　森	1	2	0	0		
岩　手	3	7	0	0		
宮　城	6	11	2	4		
秋　田	1	1	0	0		
山　形	4	5	2	2		
福　島	0	0	1	1		
地域合計	—	32	—	23	55	
茨　城	1	1	3	5	53.91%	関東
栃　木	3	5	3	6		
群　馬	2	2	4	6		
埼　玉	8	14	11	30		
千　葉	4	5	6	43		
東　京	42	172	83	222		
神奈川	15	39	18	43		
地域合計	—	238	—	355	593	
新　潟	2	3	3	4	11.55%	中部・甲信越
富　山	6	6	3	3		
石　川	3	3	0	0		
福　井	1	1	1	2		
山　梨	1	1	4	5		
長　野	5	10	1	1		
岐　阜	1	2	3	6		
静　岡	8	11	5	10		
愛　知	11	19	12	40		
地域合計	—	56	—	71	127	
三　重	3	4	2	8	15.45%	関西
滋　賀	4	9	1	5		
京　都	7	11	3	9		
大　阪	15	28	9	29		
兵　庫	7	14	20	33		
奈　良	3	6	2	5		
和歌山	0	0	2	9		
地域合計	—	72	—	98	170	
鳥　取	0	0	1	1	7.73%	中国・四国
島　根	1	3	1	2		
岡　山	2	4	2	9		
広　島	5	11	5	20		
山　口	1	1	3	6		
徳　島	2	4	1	1		
香　川	3	4	3	5		
愛　媛	3	4	1	1		
高　知	2	5	2	4		
地域合計	—	36	—	49	85	
福　岡	6	12	3	12	6.36%	九州・沖縄
佐　賀	1	1	1	2		
長　崎	1	1	1	3		
熊　本	2	3	2	8		
大　分	6	7	1	2		
宮　崎	0	0	1	2		
鹿児島	2	3	2	5		
沖　縄	1	2	3	7		
地域合計	—	29	—	41	70	
合計	**—**	**463**	**—**	**637**	**1100**	**—**

図4　地域別総上演回数推移（単位・回）

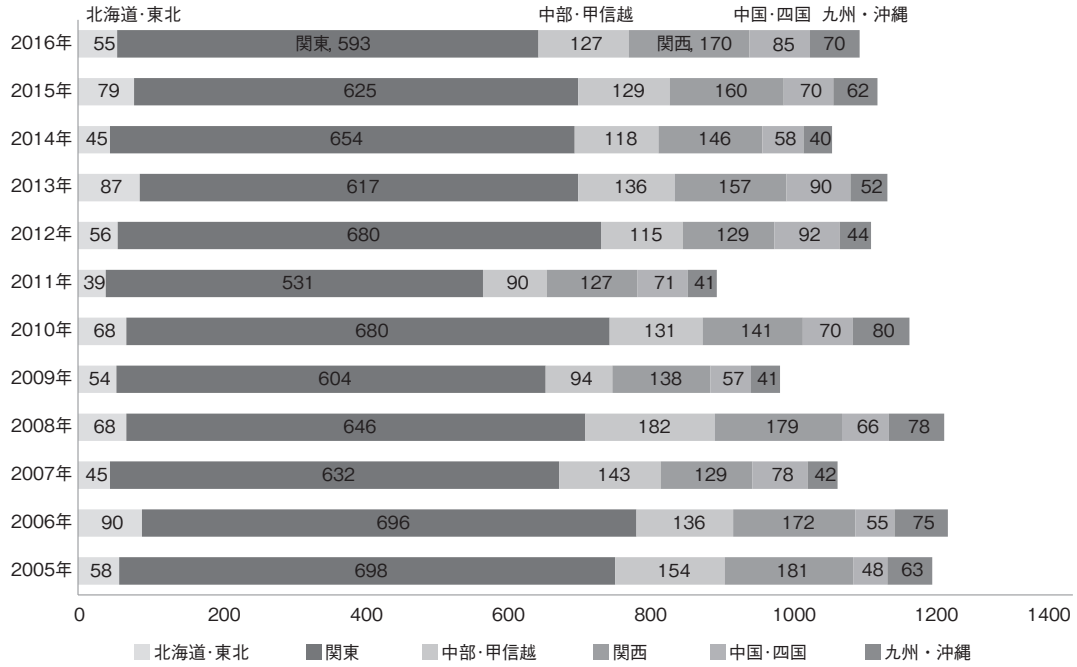


表11は、大規模公演、中・小規模公演別の実施状況である。福島県、和歌山県、鳥取県、宮崎県で大規模な全幕上演が行われていないことが見て取れる。しかし、演奏会形式でのオペラ上演はいくつか記録されており、宮崎国際音楽祭での《トスカ》は宮崎県立芸術劇場で、《ポラーノの広場》はとりぎん文化会館で開催、地域の大規模会場での重要な上演機会となった。

表12の会場別総上演回数を見てみよう。新国立劇場は、2013年には79回、さらに2014年には84回と増加していたのが、2015年には75回に、2016年にはさらに65回に減少した。一方で、東京文化会館は、2014年には改修工事のため、16回と大幅に減少したのが、30回へと数字を戻し、さらに2016年には43回へと増加した。兵庫県立芸術文化センターは、2015年は17回だったのが、2016年は11回に減少した。このほかの劇場としては、日生劇場が21回、JMSアステールプラザが12回、愛知県芸術劇場が10回など上位を占めた。

表12に、各ホールの座席数（ピット設置等による客席減は考えず最大の値とした）に公演回数を掛けて合計し、実際の入場者数ではないものの、1回あたりに鑑賞可能な数を積算している。表中の上位10か所の大規模および中・小規模会場の客席数を合計すると、35万席を超える数が提供されたことになる。これに、実際の入場者数、使用した舞台形状による客席数の減少などを勘案して実数を出す必要はあるものの、おおよその目安にはなる。

6. 演奏会形式など

この他、C表に分類された公演、すなわち演奏会形式・コンサート形式での上演の他、部分的にカットして上演されたもの等の記録を見てみよう。2015年には339回、2016年には359回が記録されている。この中でいくつかの点で重要と考えられるものを整理してみたい。

表12　2016年の会場別総上演回数（A.大規模会場で7回以上開催の会場。[　] 内は同一施設内のB.中・小規模会場）

順位	都道府県	会場名	国内団体	教育研究団体	海外団体	小計	総上演回数	客席数*2（席）	総客席数（席）*3
1	東京都	新国立劇場オペラ劇場	54	0	0	54	62	1,814	106,260 [107,664]
		新国立劇場中劇場	5	3	0	8		1,038	
		新国立劇場小劇場	0	[3]	0	[3]	[3]	[468]	
2	東京都	東京文化会館大ホール	20	0	23	43	43	2,303	99,029
3	東京都	日生劇場	21	0	0	21	21	1,330	27,930
4	広島県	JMSアステールプラザ大ホール	9	0	0	9	9	1,204	10,836 [11,508]
		JMSアステールプラザ多目的スタジオ	[3]	0	0	[3]	[3]	[224]	
5	愛知県	愛知県芸術劇場大ホール	7	1	2	10	10	2,500	25,000
6	兵庫県	兵庫県立芸術文化センター KOBELCO 大ホール	6	0	0	6	8	2,001	13,606 [14,857]
		兵庫県立芸術文化センター 阪急 中ホール	2	0	0	2		800	
		兵庫県立芸術文化センター 神戸女学院 小ホール	[3]	0	0	[3]	[3]	[417]	
6	大阪府	吹田市文化会館メイシアター 大ホール	8	0	0	8	8	1,397	11,176 [12,420]
		吹田市文化会館メイシアター 小ホール	[2]	0	0	[2]	[2]	[622]	
6	滋賀県	びわ湖ホール大ホール	3	0	1	4	8	1,848	10,608
		びわ湖ホール中ホール	4	0	0	4		804	
9	神奈川県	神奈川県民ホール大ホール	7	0	0	7	7	2,438	17,066
9	京都府	ロームシアター京都	4	0	3	7	7	2,005	14,035
9	宮城県	東京エレクトロンホール宮城（宮城県民会館）大ホール	7	0	0	7	7	1,590	11,130
合計／総上演回数 客席数・総客席数		—	160 [8]	4 [3]	29	193 [11]	193 [204] *1 /1100	23,072 [1,731]	346,676 [351,247]

＊1　併設する中・小規模会場の上演回数を含めた数字を［　］内に表した。
＊2　各会場の1回あたりの客席数は、オーケストラピット設営の有無、会場の使用形式にかかわらず、最大値とした。例（新国立劇場中劇場1038席/回）
＊3　大規模会場の客席数は、併設する中・小規模会場の客席数を含めた数字を［　］内に表した。

2016年に行われた中で、プロフェッショナルのオーケストラ主催公演（定期演奏会、特別演奏会など）、音楽祭や劇場・音楽堂等主催公演のうち、大規模な公演会場での、全幕（一部抜粋も含む）演奏会形式には、以下のようなものが挙げられる。

（オーケストラ主催の演奏会形式上演）

「オーケストラの定期演奏会」では、東京フィルハーモニー交響楽団がミョンフン指揮《蝶々夫人》を2回、バッティストーニの指揮《イリス》を2回演奏している。東京交響楽団がユーベル・スダーン指揮により《ファウストの劫罰》を2回、関西フィルハーモニー管弦楽団が飯守泰次郎と《トリスタンとイゾルデ》抜粋を1回、九州交響楽団がバッティストーニと《道化師》を1回、シャルル・デュトワがNHK交響楽団と《カルメン》を2回、それぞれ演奏した。

「特別演奏会」は、仙台フィルハーモニー管弦楽団がパスカル・ヴェロで《蝶々夫人》1回、さらに、日本フィルハーモニー交響楽団がピエタリ・インキネン指揮により、ワーグナー作曲「ニーベルングの指環」《ジークフリート》と《神々の黄昏》の抜粋を1回演奏している。また、アマチュア団体の活動ながら、愛知祝祭管弦楽団が「ニーベルングの指環」上演に取り組み始め、初年度となる2016年には《ラインの黄金》を演奏会形式で取り

上げて話題となった。

（音楽祭や劇場・音楽堂等主催の演奏会形式上演）

ザルツブルク・イースター音楽祭およびザクセン州立歌劇場によるホール・オペラ《ラインの黄金》2回公演が、サントリーホールで開催された。クリスティアン・ティーレマンの指揮によるシュターツカペレ・ドレスデンが、ドイツのオーケストラの持つ豊かな響きで会場を満たした。

東京・春・音楽祭が、マレク・ヤノフスキ指揮NHK交響楽団による演奏で《ジークフリート》をとりあげて大きな成果を挙げたほか、北とぴあ国際音楽祭は、寺神戸亮指揮レ・ボレアード演奏、佐藤美晴演出で《ドン・ジョヴァンニ》2回を上演。

ミューザ川崎では《コジ・ファン・トゥッテ》を2回、サー・トーマス・アレンのドン・アルフォンソ役での出演と演出により上演した。毎年、自主制作でオペラ公演を行っているいずみホールは、《ドン・ジョヴァンニ》を河原忠之の指揮と粟国淳演出で取り上げて、コンサート・ホールでのオペラ上演を手堅くまとめあげた。びわ湖ホールは《森は生きている》のハイライトを県内3ヵ所で巡回公演している。

7. まとめ

複数の組織がワーグナーの「ニーベルングの指環」の上演に取り組むなど大規模な活動が行われる中、地域の劇場・音楽堂の活動も一定の回数や規模で維持された2016年。歌手等を中心に結成されたオペラ団体による中・小規模会場でのオペラ上演の取り組みが活発に行われてもいる。その一方で、招聘公演や教育研究団体の公演が、少しずつ減じている気配のある2016年の日本のオペラ界だった。

数の上では、前年同様の活動傾向が見て取れたと言ってよい。各地域で広く、そして比較的まんべんなく上演が行われたこともわかる。そうした総量を踏まえて、それぞれの質はどうだろう。本年鑑で公演活動を記録していく作業を基盤として、この問いの答えを見出していけるのではないか。そう期待している。

（本稿のデータ分析後に判明した公演記録があるため、巻末の公演記録と若干の相異点があることをお断り致します。）